

『英米文化』 51, 1-16 (2021)
ISSN: 0917-3536

A Tale of Two Cities において物語化される
体験と群衆形成

—19世紀の報道特派員の手法をめぐって

原 田 昂

Mobs United by Personal Storytelling in *A Tale of Two Cities*:
Comparison with Journalistic Style of Special Correspondents
in the Nineteenth Century

HARADA Takashi

Abstract

In *A Tale of Two Cities*, serialised in 1859, Charles Dickens depicts a mass of people and its unity that eventually leads to the French Revolution. It is personal stories told that form, unite, and propel the revolutionists, although a pub where people communicate with each other looks central to the assembly in some parts of the work. Meanwhile, in the real world, special correspondents gained popularity among contemporary readers during the 1850s. They shared their experiences and opinions or described what they saw abroad in news stories and thus created a new journalistic style. This style was similar to narration rather than traditional fact-based reports. It is notable that subjective storytelling plays a critical role in both the work of fiction and journalism and that both the novel and articles by some special correspondents were published in the same magazine: *All the Year Round*. Dickens, the periodical's editor, had an intimate knowledge of the influence of narrative. Therefore, it is inferred that Dickens employed the new journalistic method in his work to depict mass gatherings. This paper examines the significance of storytelling in the novel by comparing it with the technique practiced by special correspondents in the real world.

序論

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) は1841年に出版した『バーナビー・ラッジ』 (*Barnaby Rudge* 以下『バーナビー』と略記) において、群衆の形成とその行動を見事に描いてみせた。1780年に起きた暴動をモデルとして書かれたこの作品では、不満のはげ口を見つけた人々がどこからともなく集まって群衆となり、やがて暴徒化する様子が描かれる。彼らの行動は政治的主張にも宗教的信念にも基づいてはいない。つまり、ゴードン騒乱の本来の目的とは一切関係していない。さらにこの暴徒たちは、制御不能な暴動状態にありながらも、まるで1つのかたまりであるかのように統一された行動を取る、理解しがたい群衆として描かれている。

このように得体の知れない群衆の形成と行動を描写した18年後、ディケンズは1859年に再び歴史小説『二都物語』 (*A Tale of Two Cities*) を発表した。本作品は『バーナビー』の舞台となったゴードン騒乱とほとんど同じ時代、1789年に始まったフランス革命期のイギリスとフランスを舞台としている。時代設定だけでなく、人々が暴力的な群衆となる点でもこの2つの作品は類似している。

しかし、これら2つの作品における群衆描写には明らかな違いがある。『バーナビー』においてゴードン騒乱の指導者とされている人物はゴードン卿 (Lord Gordon) である。しかし実際のところ、彼には群衆を動かす力は備わっていない。ゴードン卿という人物も、彼の思想も彼が出す指示も、群衆の行動とは無関係である。むしろ群衆の関心を惹くのは、暴徒の中で一番目立っていただけの青年だ。一方『二都物語』においても、確かに群衆は一部の場面において予測も理解も不可能な存在として描かれる。しかし、本作品において描かれる暴動の多くの場面には、暴徒たちをまとめあげる中心となるものがある。それは、アーネスト・ドファルジュ (Ernest Defarge) が経営する酒場である。この酒場は、市民たちが日々情報交換を行う場であり、またスパイたちが情報を持ち込む場でもある。このように多数の人々に同じ情報を伝える場所が、同じ意識を共有し、統一的な行動をとる群衆を形成させる。しかし注目すべき点は、この酒場において交換される情報の中でもとりわけ、誰かによって語られる個人的な経験が群衆の形成に決定的な役割を果たしていること

だ。なお本稿では、このような群衆形成の過程に焦点を当てるために、ある人物の経験が語られることによって複数の他者と共有されることを物語化と呼ぶ。

ある人物によって語られる情報が群衆を形成するこの作品が、1859年に書かれたことは注目に値する。1850年代は、新聞や雑誌による報道において特派員が人気を博した時代だ。特派員によって「語られる」記事は、それまでの単調な情報よりも読者を惹きつけた。蒸気機関を利用した印刷機が導入された1810年代ではなく、1850年代に各新聞の売上が急増したことから、その重要性がうかがえる。ルーシー・リオール (Lucy Riall) は、“For the first time in the 1850s, all kinds of newspapers and magazines achieved a true mass circulation. For example, in Britain, the radical *Reynold's Weekly Newspaper* achieved a circulation of around 50,000 in 1855 (and reached 150,000 by 1865)...” というように (129)、この時代を全ての新聞や雑誌がマスメディア化した時代と位置づけている。

現実世界の報道において特派員の記事が多数の読者をひきつけたことと、その前後に同じ作家によって書かれ、ともに18世紀に起きた実際の事件を基に書かれた2つの作品における群衆形成の過程が全く異なっていることは、決して無関係ではないように思われる。雑誌編集者として、自らも特派員を派遣していたディケンズは、この時代の特派員および彼らが採用した新しい報道手法の影響力を熟知していたことだろう。また、ディケンズが『二都物語』を連載した雑誌には、同時に特派員によって書かれた記事が掲載されていたことも見逃すことはできない。

本稿は、『二都物語』における物語化が群衆を形成する要因となっていることを検証し、本作品と当時の新しい報道形式の関係性を読み解くものである。そのためにまず第1節では、1850年代の現実世界において特派員が人気を獲得したことで物語化の関係性を検証する。本節では作品分析は行わないが、当時の特派員が物語化を実践することでそれ以前とは異なる評価を得たことは、作品と特派員との関係性を明らかにするという本稿の目的のために必要な分析である。続いて第2節では、作品の中でドファルジュの酒場が群衆形成の中心地として機能することを示す。この酒場が果たす役割を分析することは本稿の目的を直接達成するものではないが、物語化が情報交換の一形態であり、多数の人々に個人の経験を共有させるための場

所を必要とする以上、本作品において情報交換と、情報交換のための場所が群衆形成の背景にあると指摘することは、物語化と群衆形成の関係性を強調する点で意義がある。最後に第3節では、作品の中で行われる物語化が群衆を形成することを検証する。本作品において物語化は、一貫して、人々を1つの群衆へと変える決定的な役割を担っている。この事実は、本作品における物語化の重要性を示すと同時に、作品が出版された当時の現実世界において物語化を利用して人気を博した特派員の手法が作品の中で反映されていることを示す。

1. 語りと報道：19世紀の特派員

キャサリン・ウォーターズ (Catherine Waters) は“Dickens’s ‘Young Men,’ *Household Words* and the Development of the Victorian ‘Special Correspondent’”の中で、新聞が現在の形になった時期を19世紀後半だと位置づけている(18)。もちろんその背景には出版を巡る技術革新や需要の増加もあったはずだが、ウォーターズが着目するのは特派員という制度だ。国外に記者を派遣し、遠隔地の情報を報道するという制度は1850年代よりも前から存在した。しかしウォーターズは、特派員の中でもとりわけ読者を引きつける文章を書いた者たちが現れた時期を、新しい報道が生まれた時代として意味づけている。特派員の人気が高まった1850年代のメディアの中で、ウォーターズはクリミア戦争の状況を伝えた『タイムズ』(*Times*)紙ではなく、ディケンズが編集を務めた雑誌『家庭の言葉』(*Household Words*)を特別視している。彼女はその理由を、“*Household Words* provided contributors... with an apprenticeship in the techniques of so-called ‘word-painting’ that would come to distinguish ‘special correspondence’ as a new genre within Victorian print culture”と説明する(19)。『家庭の言葉』の特派員たちは、現実の事件や旅行記を伝えるレポーターでありながら、ディケンズ流に文章を書く方法を学んだ。このことが、彼らを出版文化の中で特殊な地位に置いたということだ。

ジョン・ドルー (John Drew) もまた1850年代の特派員、特にディケンズの下で活動した特派員を新しい存在として位置づけている。彼が“Foreign correspondents as

factual reporters had long been a feature of the daily press, but Dickens's varied deployment in his magazines of 'specials' as writers of sketches of travel, life and manners... was a distinct innovation" と評価するように (119), 特派員によって書かれる記事が事実主義から個人的な体験談へと変化したことが重要なのであり, 19世紀半ばの特派員はそれ以前の特派員とは異なるものとして考える必要がある。

当然ながら, 多数の読者を楽しませるディケンズの文章を真似て, 物語のような文章を書くことは, 極力事実に即した情報を書き記す報道記者の仕事を逸脱してしまう。ウォーターズもディケンズの特派員たちが批判を受けたことに言及しているが, しかしそれは一部の声であり, 結果的にこの試みが成功であったと結論づけている¹。彼らの手法は文学とジャーナリズムの境界線を曖昧にするものであり, "Such generic instability drew criticism from some, but remained a source of popular appeal in the work of special correspondents in the decades to come" というのだ (30)。新聞や雑誌といった情報獲得の手段が爆発的に増えた19世紀において, 読者が求めたものは均一化された情報ではなく, 独自性のある視点であった²。それは報道というよりもむしろ, 物語といえるだろう。

一方, 海外に記者を派遣して売上を伸ばしたくても, その費用をまかなえない新聞社もあった。そのような新聞社では, 地元の記者にあたかも現地に行ったかのような記事を書かせた。この現象は特にドイツで流行し, ドイツ語文学研究者ペトラ・マクギレン (Petra S. McGillen) はフェイク・ニュースの歴史を概観しながら, "By the 1850s, the phenomenon was so widespread in Germany that it had become its own genre—the 'unechte Korrespondenz,' or 'fake foreign correspondent's letter,' as people in German news trade called it" と指摘する (para7)。ドイツの偽特派員の中には, 後にドイツのチャールズ・ディケンズと呼ばれる小説家テオドール・フォンターネ (Theodor Fontane) もいた。彼はロンドンに滞在し, その目で見た事件をドイツの新聞に寄稿する特派員という設定であったが, 実際にはロンドンを訪れたことなど1度もない。彼は, 既に発行された新聞や雑誌が伝える情報を切り貼りし, 自分がそれを見てきたかのように記事を書いた。このように作られた記事をマクギレンは次のように評している。

His readers probably believed him because his story confirmed a lot of things they already knew from prior press coverage. Fontane was careful to use familiar imagery, stereotypical descriptions and well-known facts about London. Meanwhile, he dressed up these familiar elements to make them more entertaining. (para13)

マクギレンは、この手法が19世紀の需要と合致していたこと、および現在に至るまでマスメディアがこの方法を用いていると指摘して論を展開しているが、この記述は『二都物語』をメディアという視点から読み解く上でも重要な指摘を含んでいる。

まず、フォンターネの仕事は単なるブリコラージュではなく、既に知られていることをより面白く作り変えることであった点だ。これは、ディケンズの特派員たちが行ったのと同様、文学とジャーナリズムの境界線を曖昧にする行為だ。フォンターネの場合、実際の事件もロンドンも見てすらいないのだから、より物語に近かったと言って良いだろう。

もう1つの重要な点は、フォンターネがただ物語ったのではなく、真実らしく物語ったことだ。彼が用いたステレオタイプや有名な話は、確かに部分的には真実を含んでいるかもしれない。さらに、彼が借用した新聞記事は事件について正しい状況を伝えていただろう。しかしこれらの要素は、報道される事件やロンドンという都市をドイツの読者に信じさせるためのものではない。これらは、記者がロンドンにいることと、その記者が自分の体験を記事にしたこと、この2つを信じさせるための仕掛けだった。

フォンターネの記事と他の新聞や雑誌に掲載された記事との違いは、この2点だけである。例えばロンドンで大火災が起きた、という情報そのものはどのメディアも伝えた。フォンターネの記事は、同じ情報を彼の目線から、現実味を伴う文章で、読者の興味を引きながら語るものであった。現地への派遣が本当に行われたかどうかを別とすれば、これはちょうどディケンズが特派員たちに任せた仕事と同じである。19世紀、特に1850年代以降のヨーロッパにおいて、活字メディアとその読者が求めたものは特派員によって語られる独自の物語であったのだ。第3節で詳述するが、この手法はちょうど、『二都物語』において個人の経験が多数の人々の関心を集める過程と同じである。

2. ドファルジュの酒場—パリ市民のメディア

本稿は、『二都物語』における群衆形成の要因が物語化であることを明らかにするものであり、またそれゆえに本作品が19世紀後半の特派員によって書かれた記事と重ね合わせられることを指摘するものであるが、この目的を達成するためには本作品において情報伝達とそれを可能にする場所が群衆形成の要因として描かれていることを示す必要がある。本節では、第3節における物語化分析の前提となる条件を示すために、ドファルジュの酒場が情報交換の場であること、および作品の中で群衆形成の中心地であることを検証する。

本作品においてパリ市民が集まり、情報を交換する上で最も重要な場所はドファルジュの酒場である。酒場は現実の世界においても重要な情報交換の場であった。ボニー・キャルホーン (Bonnie Calhoun) は、ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) が指摘した公共圏の概念と関連させながら、17世紀から18世紀にかけて “[C]offeehouses were the most important public sphere in London and the same was true for the salons in Paris” と主張する (75)。人々が自由に集まり、あらゆる話題について議論することのできる場所が公共圏なのだから、この主張は的を射ている。もっとも、キャルホーンはある程度教養があり、経済的余裕のある人々にとっての公共圏を想定している。コーヒーハウスやサロンに加えて、酒場もまた同様の理由で、多くの人々と情報が集まる場であった。このような背景を踏まえると、ディケンズがドファルジュの酒場を情報交換の場として描いたのも当然のように思われる。

本作品の第1部第5章は、ドファルジュの酒場の玄関前で荷台からワイン樽が転げ落ちて割れる場面から始まる。その直後、突然周囲の人々が路上にこぼれたワインに殺到する。人々が割れるワイン樽を見たとか、石畳の間にワインが溜まっているのを見たという描写さえなく、ワイン樽が割れるとすぐに “All the people within reach had suspended their business, or their idleness, to run to the spot to drink the wine” と書かれている (28)。彼らは、こぼれたワインを飲むという目的こそ一致しているが、ただ偶発的に集まっただけの互いに無関係な群衆だ。『バーナビー』でもそうであったように、このような群衆は忽然と形成されるものとして描かれる。それだけでなく、

“When the wine was gone, and the places where it had been most abundant were raked into a gridiron-pattern by fingers, these demonstrations ceased, as suddenly as they had broken out” というように (28), 解散もまた突然であったことが明言されている。つまり, この場面ではドファルジュや彼の酒場が能動的に群衆形成に関与するわけではない。しかし, 物語序盤のこの場面でドファルジュの酒場前に人々が集まることを, 物語後半の群衆形成と重ね合わせてみると, 本作品における酒場の機能が強調されているように思われる。

先述した人々は, ワインを飲み終わった後それぞれの仕事に戻るが, その際赤ワインと泥で汚れた彼らの手がパリの街中を赤黒く染めることになる。“The wine was red wine, and had stained the ground of the narrow street in the suburb of Saint Antoine, in Paris, where it was spilled...and one tall joker...scrawled upon a wall with his finger dipped in muddy wine lees—BLOOD” とあるように (29 大文字は原文), 街中の赤黒い染みは血を暗示しており, その後“The time was to come, when that wine too would be spilled on the street-stones, and when the stain of it would be red upon many there” と書かれていることから (29), 後に起こるフランス革命までもが暗示されている。そして, そのフランス革命が発生する時, ドファルジュの酒場は明確に群衆の形成要因となる。

第 2 部第 15 章を見てみると, 人々がワインに群がったあの路上に面した酒場の中では革命派の人々が情報を交換し合っている。彼らは酒を飲むための金を十分持っているわけではない。それでも彼らがこの酒場に来るのは “[T] hey glided from seat to seat, and from corner to corner, swallowing talk in lieu of drink, with greedy looks” と書かれている通り (128), 会話のためである。後に暴力的な革命へと向かうのは, どこにいたのかも分からないのに突如として集合する人々ではなく, この酒場で情報を交換し合う人々だ。このことは, 第 2 部第 21 章におけるバステューユ牢獄襲撃の描写にはっきり書かれている。この暴動で使われたマスケット銃についてはどこから出てきたのか分からないとされているが, しかしそこに集まる人々については “As a whirlpool of boiling waters has a centre point, so, all this raging circled round Defarge’s wine-shop” と (163), その中心が明らかにされている。これらの描写から,

ドファルジュの酒場がパリ市民の情報交換の場、すなわちメディアであり、人々を統一的な暴徒として集合させる中心となっていることは疑いの余地がない。

さらに、暴徒たちはドファルジュの酒場を離れてからも、酒場の主人であるドファルジュ夫妻を中心として行動する。例えば、バステューユ牢獄襲撃の最中、ドファルジュはジャック 3 を連れてアレクサンドル・マネット医師 (Dr. Alexander Manette) が隠した手記を探すため北の塔へ向かう。その後再び暴徒たちの元へ戻ってきた時、ドファルジュとジャック 3 が発見するのは、“[T] hey found it [raging flood] surging and tossing, in quest of Defarge himself” とあるように (166)、ドファルジュを探し求めて押し寄せる暴徒たちである。監獄に押し寄せ、激しく暴力的な態度で囚人の解放を求めながらも、暴徒たちは制御不可能な状態に陥ることなく、常にドファルジュを中心として行動するのだ。

その 1 週間後、既に死んだと思われていたフーロン (Foulon) という人物が生きていたという情報が、ドファルジュによってもたらされる。再びドファルジュの酒場を中心に民衆が決起し、飢えた者は草を食べればよいと言って民衆の怒りを買ったフーロンは、逆に自分の口に草を詰められて殺されることとなる。ここでもまた暴徒たちは、手当たり次第に武器を取り残忍で暴力的な行動を取りながらも、統一された群衆として行動する。老人と子供を残して町中から集まった市民たちは、“They were all by that time choking the Hall of examination” と書かれるように (169)、フーロンを逃さぬよう結束して裁判所を取り囲む。この時中心的な役割を果たすのは、ドファルジュではなくその妻である。裁判所を囲んでフーロンが出てくるのを待つ暴徒たちはドファルジュ夫人の発言を口から口へと伝え、“[C] ertain men who had by some wonderful exercise of agility climbed up the external architecture... and acted as a telegraph between her [Madame Defarge] and the crowd outside the building” とあるように (169)、ドファルジュ夫人と群衆を結ぶ電信の役割を果たした者もいた。ここで群衆は個人として行動するのではなく、ドファルジュ夫人を中心とした情報網を完全なものとするために、ひとかたまりの群衆の一部として機能する。

このように、この酒場が人々を集合させる核となっていることは疑いの余地がない。路上のワインに群がる人々と血を流し戦う革命の群衆は、集合の要因や過程こ

そ異なるものの情景としては極めて類似しており、酒場と群衆形成の関係性を強調しているように思われる。特に、前者は偶発的かつ突発的に集まった互いに無関係な人々の集合に過ぎないが、一方で後者はドファルジュの酒場で交換される情報によって統合された人々である点を考慮すれば、本作品において酒場はただ人々を集合させる場であるだけでなく、フランス革命勃発以降は暴動に参加したフランス市民に統一された意識を共有させ、皆で同じ行動を取らせる場であるように思われる。しかしフランス革命勃発後、一部の場面ではドファルジュの酒場における情報交換が、それまでとは異なる機能を見せる場面がある。

本作品の第3部はフランス革命勃発後の検問の様子から始まる。そこを通る人々の通行が許可されるか否かは、“their capricious judgment or fancy deemed”によって(185)、すなわち担当者の気まぐれによって決められる。さらに、物語終盤では酒場の主人であるドファルジュ自身、マネット医師に同情を寄せたことで、話し合いの場に参加することができなくなる。これらの描写は、情報交換の場としての酒場の機能を否定するものではない。革命以前は国家権力の管理が届かない情報交換の場であった酒場は、フランス革命によって権力構造が変化しつつある中で、今度は酒場の権力者であるドファルジュの目が届かぬ情報交換の場となったのだろう。

本節では最も明確な空間的メディアとして酒場に焦点を当てたが、注目すべき点は本作品が、人々が集まる場所とそこで行われる情報交換を、群衆形成の要因として描いていることだ。パリ市民たちがひとかたまりの群衆として行動するのは、それ以前に意思を統一するための場所があるからだ。さらに本作品は、ある場所に集まった人々に同じ意識を共有させる情報伝達手段にも意識を向けている。それは、本稿が物語化と呼ぶものであることを次節で検証する。

3. 物語による群衆形成

ドファルジュの酒場では市民同士の情報交換が行われるだけでなく、様々な形である人物の体験が市民たちに共有される。そして、ある人物の体験を共有した市民たちは統一的な行動を取る群衆となる。最も重要で明確な例は、マネット医師の体

験がドファルジュによって他者に共有されることだ。マネット医師の個人的な経験が物語化される時、市民たちが一丸となる場面を2つ確認したい。

1つ目の場面は、第1部第5章に見られる。この場面では、ドファルジュの酒場でマネット医師がジャックたち、すなわちパリ市民たちによって見物されている。ジョン・ボウエン (John Bowen) はこの場面を取り上げて、マネットが“a chosen few”によって見られ、その後ドファルジュがドアを2回か3回叩き、鍵でドアを3回か4回引つ掻くことを指摘している(105)。ボウエンは、本作品において数字が象徴的に用いられていることを示すためにこの場面を引用している。しかし、挿入される数字が徐々に大きくなっている点に注目すれば、この場面は徐々に人々を集合させ巨大な群衆を形成する要因になっていると読むこともできるだろう。イギリスからマネット医師を迎えにフランスまでやってきたジャーヴィス・ロリー (Jarvis Lorry) はこの場面を見て、医師を見世物にする不適切な行為だと感じている。しかし、フランス貴族によって不当に逮捕されたマネット医師を見ることは、革命家たちにとっては単なる見世物ではなく、貴族の不正という経験を共有する行為であった。マネット医師を不当に投獄した貴族の1人マルキス・サンテヴレモンド (Marquis St. Evrémonde) は第2部第9章において“*Our not remote ancestors held the right of life and death over the surrounding vulgar*”と発言しており(97)、まさにこの思想に従って庶民の命と自由を奪い、また自分を告発しようとする者を捕えた。18年間を牢獄で過ごしたことで自己を喪失し、独房の番号で自分の名を呼ぶマネット医師の姿は、彼の個人的な体験を映し出す。貴族による理不尽な振る舞いは誰でも知っている情報に過ぎないが、貴族によって不当な扱いを受けた医師の個人的な経験が共有された時、人々は統一された群衆となる³。だからこそドファルジュは、自らと同様ジャックを名乗り革命を企てる者にもマネット医師を見せ、彼の経験を物語化していたのだ。

この物語化の効果は、バスティーユ襲撃の場面によく表れている。第2節で見たように、バスティーユに集まった市民たちは気まぐれな態度を取ることなく、団結して囚人の解放を求める。彼らが同じ場所に集まり、物語によって同じ経験を共有していたことを考えれば、この場面における市民たちの行動には疑問の余地がな

い。また、バスティーユ襲撃の際市民たちとは別行動をとるドファルジュが、マネットの体験が書き記された手記を探し求めることも、バスティーユに集い結束する市民たちの行動の背景にマネット医師の体験があることを強調している。

しかし、フランス王と王妃が処刑されると、市民たちは再び制御不能で気まぐれな状態に陥る。その様子は、チャールズ・ダーネイ (Charles Darnay) が逮捕されてからの一連の流れに最もよく表れている。彼は突如施行された法律によって逮捕され、裁判では“Darnay, was accused... whose life was forfeit to the Republic”と書かれるように (212)、貴族に代わって今や革命家が理不尽に権力と暴力を行使する主体となっている。傍聴人たちも被告を共和国の敵と呼び、処刑を求め叫ぶのだが、裁判が進むにつれて彼らの態度は一変し、ついにダーネイが放免されると彼らは歓喜してダーネイを取り囲み、次々に抱擁する。個人的な体験の共有とは異なり、法律という無味乾燥な情報は、たとえそれが傍聴人の味方である革命家たちによって制定されたものであっても、人々を統合する力を発揮することはない。

しかし後に再びダーネイが逮捕された際には、人々は皆彼の処刑に賛同する。なぜなら、これがマネット医師の体験が物語化される 2 つ目の場面なのだが、バスティーユ牢獄でドファルジュによって発見された手記が朗読されたからだ。この手記は投獄されたマネット医師が書いたもので、ダーネイの父親と叔父が行った非道な行為と、マネット医師の獄中での体験が詳細に記録されている。ドファルジュがこの手記を裁判所に集まった人々の前で読んだことで、再びマネットの体験が共有され、人々を確固とした群衆として結びつける。その様子は“The narrative called up the most revengeful passions of the time, and there was not a head in the nation but must have dropped before it”と書かれており (247)、1人として例外とならないほど強力な結束であることが分かる。結末だけを見ればダーネイは確かに生き延びるが、結局処刑の決定が撤回されることはなく、彼を敵として市民の意識が統一されていたことは疑いの余地がない。

以上に挙げた 2 つの事例ではいずれも、マネット医師の体験が共有された時、本来は気まぐれで予測不可能な行動をとる市民たちが同じ意識を共有し、ひとかたまりの群衆となる。しかも、マネット医師の例は決して偶然や例外ではない。ある人

物によって語られる体験談は、本作品において常に群衆を形成する要因として機能する。

第 2 部第 23 章では、パリ市民たちがギャベール (Gabelle) という役人を襲撃する。この場面にはドファルジュ夫妻の姿はないし、酒場で計画が立てられたとも書かれていない。その代わり、この襲撃の直前には “[T] he village, light-headed with famine, fire, and bell-ringing, and bethinking itself that Monsieur Gabelle had to do with the collection of rent and taxes—though it was but a small instalment of taxes, and no rent at all” と書かれている (176)。一見するとこの襲撃は、飢えと火事と鐘の音で正気を失った市民たちの突発的な行動のように思われるし、ギャベールが地代を徴収しているという誤った認識に基づいた無思慮な行動のようにも思われる。しかし実は、ギャベールを標的とすることは襲撃当日よりもずっと前から決定されていたことであり、彼を攻撃する真の理由も市民たちの間で共有されていた。その背後にはやはり、物語化がある。

第 2 部第 15 章では、青い帽子を被った道路工事夫、ジャック 5 がドファルジュの酒場へやってくる。彼は以前、侯爵殺害の下手人とされる人物を目撃していた。ジャック 5 は、彼がこの下手人を初めて見た時のこと、この下手人が役人に追い立てられて処刑されたことを、酒場に集まる市民たちに語る。この語りの最中、ジャック 5 は自分が見た光景を演じてみせる。しかも彼は、“[He] used his blue cap to wipe his face, on which the perspiration had started afresh while he recalled the spectacle” と書かれるように (133)、汗をかくほどありありと自らが語る光景を思い出している。ジャック 5 は迫真の語りと演技によって自身の体験を物語化し、この個人的な体験を共有した市民たちは、話の中に登場した役人を標的にすることを決定する。第 2 部第 8 章の描写によると、侯爵殺害犯の捜索を命じられたこの役人こそギャベールなのだ。一見すると説明不可能にも見える市民たちの行動が、その実個人的な経験の共有によって決定されているというこの事実は、本作品における物語化の意義を強調している。

本作品ではさらに、他とは異なる方法で物語化が描写されている。それは、ドファルジュの妻による編み物だ。彼女はいつも酒場で編み物をしているが、その編

み物の中には彼女にしかわからない方法で標的の名が編み込まれている。彼女は酒場で共有される誰かの経験をすぐ側で聞きながら、それを編集、あるいはテキスト化する人物なのだ。もちろん襲撃対象の名前を編み込むというのは比喩であり、彼女によって編まれた生地、すなわちテクスチャは実際に判読可能なテキストではない。しかし、第2部第16章では、“Madame Defarge with her work in her hand was accustomed to pass from place to place and from group to group: a Missionary—there were many like her…”と書かれるように(142–43)、他者の経験が編み込まれた編み物を手に人々の元を訪れるドファルジュ夫人は、フランス市民にとっての伝道師としての役割を果たすのである。他にも同じような女性がたくさんいたという記述から、ドファルジュ夫人によって伝えられた体験談は酒場に来ることのできなかった女性たちの編み物に編み込まれ、さらに多くの人々に広められたのだと考えられる。この一連の情報の流れは、直接的にある人物の経験を共有する行為ではないものの、間接的な物語化であると言えるだろう。だから、女性たちが編み物をする傍らに座るドファルジュ夫人は、“Madame Defarge sat... with such suppressed approval as was to be desired in the leader of the Saint Antoine women”と表現される(167)。彼女は編み物による特殊な体験の記憶および共有を行う人物であるがゆえに、同じく編み物によって他者の体験を共有する女性たちをまとめるリーダーなのである。

このように、本作品における物語化は人々の意識を統一する。それは、単純な会話や法律による情報伝達にはなし得ない現象だ。しかも誰の体験がどのような方法で共有されたとしても、常に同様の機能を発揮し続ける。

結論

以上のように、『二都物語』において人々を集めさせ、同じ意識を共有させ、統一的な行動をとらせる最も重要な要因は、ある個人の経験を語って聞かせること、すなわち物語化である。もちろん本作品では、人々が集まり情報交換を行う場として、酒場が群衆の形成を可能にする。しかし、集まった人々に情報を伝える方法が作品の中で繰り返し描写されていることを見逃すことはできない。多数の人々に同じ情

報を伝える場において、彼らを群衆として統一するために決定的な役割を果たしているのは物語化だ。

この物語化という行為は、本作品が発表されたのと同じ時代に現実世界において、報道特派員たちが用いた新しい報道手法であった。彼らは、それ以前の事実主義的で客観的な記事ではなく、文学作品的で個人的な経験に基づいた記事を書くことで読者の興味を引き、人気を獲得した。作家であると同時に雑誌編集者であり、また一部の特派員にとって師でもあったディケンズが、この手法を自身の作品の中で利用し、現実世界でそうであったように物語の世界でも極めて重大な影響力を持つ手法として描いていることは、本作品における物語化の重要性を示すだけでなく、本作品を19世紀後半の特派員との関係性の中で読むことを可能にしている。

(本稿は、第71回日本英文学会九州支部大会(2018年10月21日)のための草案を加筆改稿したものである。)

注

- 1 ディケンズの下で学んだ特派員を迎え入れて1855年に創刊した『イラストレイテッド・タイムズ』(*Illustrated Times*)は、1年足らずで『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』(*Illustrated London News*)の2倍の売上を記録したという(Edwards 41)。なお、1855年の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の売上は、20万部であった(Hibbert 13)。
- 2 ある研究では、集合的記憶の形成要因を政府や社会中心の情報伝達ではなく、個人的な相互作用や会話に求めている。それによると、記憶は不確かで再建可能なものであり、聞き手は話し手が語る内容を自分の経験として記憶するという(Hirst *et al.* 147)。
- 3 体験談の共有が人々の意識を統一することについては、“As people interact, initially disparate memories become more similar. As the memories of members of a community become more similar, the group achieves a stronger collective identity.”と説明する研究がある(Hirst *et al.* 155)。ここでは、各々が抱く貴族への異なる不満が、マネットの体験に類似したものへと変化したと思われる。

引用文献

- Bowen, John. "Counting On: *A Tale of Two Cities*." *A Tale of Two Cities and the French Revolution*, edited by Clin Jones, Josephine McDonagh, and Jon Mee, Springer, 2009, pp. 104–125.
- Calhoun, Bonnie. "Shaping the Public Sphere: English Coffeeshouses and French Salons and the Age of Enlightenment." 2008. *Colgate Academic Review*, vol. 3, no. 1, 2012, pp. 74–99, <https://commons.colgate.edu/car/vol3/iss1/7/>. Accessed 25 Oct. 2020.
- Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. Norton Critical ed., W. W. Norton, 2020.
- Drew, John. *Dickens the Journalist*. Palgrave Macmillan, 2003.
- Edwards, P. D. *Dickens's 'Young Men': George Augustus Sala, Edmund Yates and the World of Victorian Journalism*. 1997. Routledge, 2016.
- Hibbert, Christopher. *The Illustrated London News: Social History of Victorian Britain*. Angus and Robertson, 1975.
- Hirst, William, et al. "Of Sins and Virtues: Memory and Collective Identity." *Understanding Autobiographical Memory: Theories and Approaches*, edited by Dorthe Berntsen and David C. Rubin, Cambridge UP, 2012, pp. 141–159.
- McGillen, Petra S. "Techniques of 19th-Century Fake News Reporter Teach Us Why We Fall for It Today." *The Conversation*, 6 Apr. 2017. <https://theconversation.com/techniques-of-19th-century-fake-news-reporter-teach-us-why-we-fall-for-it-today-75583>. Accessed 25 Oct. 2020.
- Riall, Lucy. *Garibaldi: Invention of a Hero*. Yale UP, 2007.
- Waters, Catherine. "Dickens's 'Young Men,' *Household Words* and the Development of the Victorian 'Special Correspondent'." *Reflections on/of Dickens*, edited by Ewa Kujawska-Lis and Anna Krawczyk-Laskerzewska, Cambridge Scholars, 2014, pp. 18–31.